九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

インターンシップ授業の展開と社会人基礎力の育成への効果

中川, 忠宣
大分大学高等教育開発センター

https://doi.org/10.15017/1560830

出版情報：生活体験学習研究. 15, pp.19-28, 2015-02-15. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

日本生活体験学習学会誌　第15号　19－28（2015）

インターンシップ授業の展開と社会人基礎力の育成への効果

中　川　忠　宣*

Internship Classes in the University and its Effects on Developing Fundamental Competencies for Working Persons

Nakagawa Tadanori*

要旨　本研究は、学生のキャリアデザインの基礎的な力を学ぶための教養教育の授業を有効的に実施するための１つの方策の提案として、カリキュラム構成の研究と社会人基礎力の育成という２つの観点から、評価を通して報告するものである。

学生の進路選択等の視野を拡大し、自分自身の将来についてキャリアをデザインしていくための実践的な学びをし、就職におけるミスマッチをなくすこと、ないし是正することをねらいとしている。未だ職業に関心の無い学生も含めて、単に職業体験ということではなく、インターンシップ（就業体験）を効果的に実施するには、企業や関係団体等との連携を密にすることが重要である。そのことによって、学生のニーズと企業のニーズをマッチングさせ、授業の目的が達成できるという前提で、講義・職場体験・取材活動・企業の魅力発信の４つで構成しており、事前、事後の活動も含めて分析することとした。

キーワード　インターンシップ、社会人基礎力、授業カリキュラム

Ⅰ　はじめに

本会が、平成26年２月に開催した第15回研究大会のテーマ「若者のコミュニケーション能力を高める地域協働のあり方」の研究を行う際のシンポジウムの素材として提案して、多くの示唆をいただいた。本研究実践は、平成23年度の経済産業省の「産学協働教育を通じた中小企業の魅力発信事業」を再受託し、本学高等教育開発センターの生涯学習支援事業として、授業外のキャリア形成の取組から始まり、平成24年度からの文部科学省事業「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」における３年間の実践と成果・課題の研究を報告するものである。

本授業実践は、大学入学直後で、就職に関しては未だ関心が少ない１年生と２年生を対象にして行い、インターンシップを通して、大学における学びの関連や大切さ、社会人として必要な基礎力への気づきなどを目指したものであり、今後の大学生活における学修の基礎を培う１つの試みである。本提案は平成25年度のデーターを中心に分析し、考察することとしたが、事業全体が推測できるような構成を試みている。

Ⅱ　インターンシップ授業の実践と研究

１．インターンシップ授業の目的

経済産業省が実施する本事業の目的を基盤において、本センターとしては生涯学習の観点から、中堅、中小、ベンチャー企業等との連携を密にして、インターンシップの体験から、大学における学びの関連や大切さや、社会人として必要な基礎力への気づき

*大分大学高等教育開発センター
連絡先：〒870-1192　大分市大字旦野原700番地　大分大学高等教育開発センター
電話／ FAX：097-554-6027　E-mail: nakagawa@oita-u.ac.jp

目指し、今後の大学の学修における基礎を培うことを目的としている。そのために、自分自身の将来についてキャリアをデザインしていく教育カリキュラムの研究と実践を、講義・職場体験・取材活動・企業の魅力発信の４つの柱で構成している。さらに、職場体験を行った企業の取組についてのプレゼン活動等を行い、中小企業の魅力に気づくなどして学生の進路選択等の視野を拡大することを目指している。

２．授業内容の概要

①科目名　「中小企業の魅力の発見と発信」
②対　象　全学部１年生～２年生
③授業の時期及び事前説明会、受講者数
○集中講義
平成25年２月20日(水)～３月８日(金)
平成25年８月20日(火)～９月13日(金)
平成26年８月20日(水)～９月12日(金)
○受講生数
H24年度：19名
H25年度：13名
H26年度：７名
④授業の目標
・授業を通して身につけることができる社会人基礎力（別途評価資料）を有する。
・十分な学びの足跡（活動、成果、自己評価、他者評価など）として記録し、職業選択に関する基本的な考え方を、職業と関連づけながら自分の生き方を他者に説明できる。
・「職場の魅力、職場の楽しさの重要性、人とのコミュニケーションの大切さ」に関する気づきを、職場体験の関係者・他の受講生との交流をもとに他者へ説明できる。
・魅力発信に必要な素材を適切に収集し、受け手（就職活動をしようとする者）にアピールするメディアを制作できる。

３．インターンシップ授業全体の学習プログラムの概要

平成24年度は後期授業の実施、平成25年度及び平成26年度は前期授業として開講したため、ここでは、平成25年度及び平成26年度の流れを報告する。

(1) 受講までの流れ

①６月に掲示及び授業で受講者案内をする。
②６月下旬に受講希望者等に説明会を行う。
③受講希望者は、各学部へ履修届を提出する。
④大分県中小企業家同友会が紹介した職場受け入れ先一覧から、体験先を選択するためにＨＰ等で業務内容等を調べて決める。
※２～３人グループを作り、リーダーを決めて進める。
⑤各グループで受け入れ企業へのお願いの挨拶・事前打合せをする。

(2) 授業の流れ

＜プログラム１：講義＞

講義１日目
①大学教員等による事前指導講義
②キャリアデザインとインターンシップに関する講義
③ポスター等作成の目的と手法の講義
講義２日目
④中小企業家同友会派遣講師による企業主による講義（２名）（１時限～２時限）
※職場体験先の担当者との打ち合わせ

＜プログラム２：職場体験＞

中小企業家同友会紹介先企業
①１企業あたりの受講者数：２～３名
②３日の職場体験（製造・運搬・販売等）

＜プログラム３：取材活動＞

①半日～１日の取材
②取材準備
・体験先企業の魅力について、就職活動をしようとする大学生にＰＲするポスター・プロモーションスライド等の作成をするための映像撮影やインタビュー等を行う。
・取材計画、ナレーション、絵コンテ、ポスター構想を作成しておく。

＜プログラム４：メディア作成＞

①体験先企業の魅力を発信するメディアを作成する。（外部講師）
※ポスター又はプロモーションスライドの作成
②作成の目的
・職場体験で感じた中小企業の魅力を就職活動

をしようとする大学生へＰＲする。

４．成果発表会

（1）参加者：大学関係者・企業関係者・作品作成講師・ＮＰＯ法人関係者・受講学生

（2）内容　①作成したメディアを通して中小企業の魅力をＰＲする。

②グループディスカッション

・授業に関する感想や職場体験で学んだことなど、学生同士の意見交換や大人からの質問を含めたディスカッションをする。

（3）社会人基礎力の事後調査と総括

５．評価

①報告書「中小企業の魅力の発見と発信の記録」の提出

６．授業実施体制と役割

地域社会の企業等の教育力を生かした学習プログラムを実施するのは、大学と企業、各種組織等との日常的な協力体制と相互のメリットを共有していくことが大切である。本授業においてはその前提に立って、以下のような体制で実施した。

①大分大学高等教育開発センターは、授業主体としての企画づくり、シラバス作成、講師陣の選任、授業実施、評価等の役割を担う。

②大分県中小企業家同友会は、企業経営者講師の選任、インターンシップ受け入れ企業の選定、事前うちあわせ・評価活動への参加の周知を行う。

○大分県中小企業家同友会としては以下のような願いを持っており、最終的には、企業に就職してすぐに生かされる（職務遂行）の力と、グレードアップしようとする人間性を求めている。

・働く事の意義、楽しさを知る
・アルバイトと違う「職業観」を養う
・コミュニケーションの大切さを理解する
・地域の中小企業の役割を知る
・経営者の生きざまから企業家精神を学ぶ
・生きることや働くことについて、主体的に考える機会とする

③大分県「協育」ネットワーク協議会は、大学が直接依頼する講師以外の外部講師の選任及び講師として指導する。具体的には、ビジネスマナーやメディア作成等の専門的な内容についての講師選定と派遣を行う。

④授業及びカリキュラム研究を行うために、キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会へ研究委託する。

Ⅲ　授業実践から見る成果と改善内容

１．学生の授業評価

（1）授業プログラムの評価

社会人基礎力がどう形成されたか後述することとして、まず、授業への学生の評価について報告する。このデーターは、平成24年度と25年度のデーターを合わせたものであり、図１は事前及び授業の４つの構成毎の内容、事後の活動等に関する評価である。ほとんどの項目で高い評価であることがわかる。

図２の授業全体の評価においても、この授業への期待度が、授業前と比較して終了後は、「期待以上であった」が32人中19人、「期待通りであった」が13人で、全ての学生が高く評価している。平成24年度に比較して、授業改善したこともあり、「期待以上」が70％と多くなっており、学生にとっての効果が表れていると言えるであろう。

（2）受講者の視点からの授業改善の視点

受講者からの受講後の授業改善に向けた次のような要望が出されている。

○メディア作成のやり方を職場体験に行く前にしっかりやっていればどこに着目して取材をすればよいかなど明確にできたと思うのでメディアの作り方に力を入れて欲しいと思います。

○こちらからの受け入れ企業への説明不足だったかもしれませんが、企業の方と日程などを決めるときにスムーズにいかなかったので、この授業のことをよく知られていないのかなと少し気になりました。

○授業から職場体験、メディア作成、報告会までを集中して２週間程度で実施して欲しいと感じました。

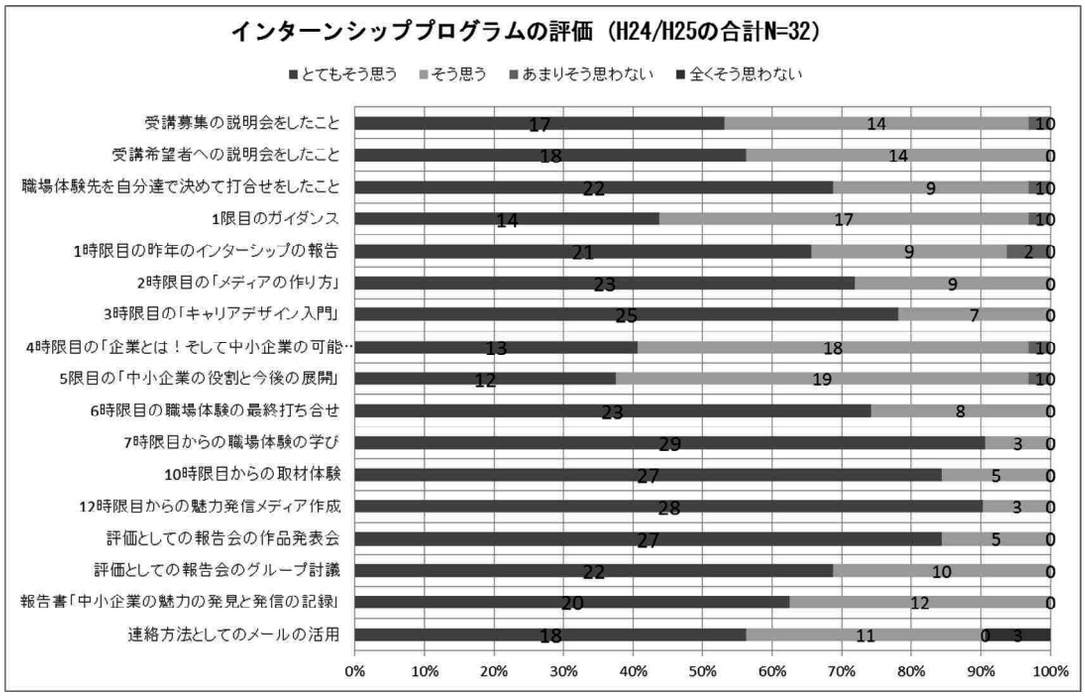

図１　学習プログラム毎に関する評価

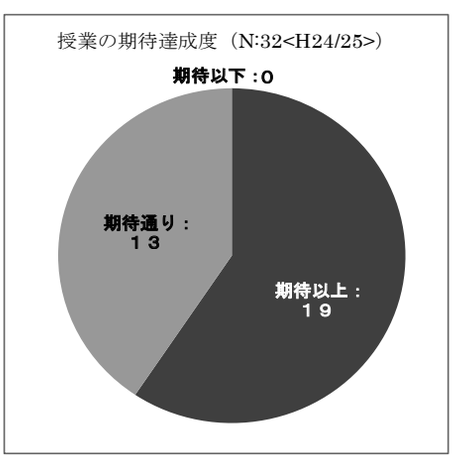

図２　授業全体への評価

２．学生の学び

（1）学びの概要

「具体的な学び」の内容は、授業ノートの「特に、自分にとって学べたこと」の欄から次の内容に整理することができる。改善点も指摘されているので後述する。

①就職活動支援（ex. 専門科目外を知る・仕事への考え方）になった（57.9%）。

②職業選択の視点（考え方）を変えることができた（52.6%）。

③中小企業に目を向けることが出来た（47.4%）。

その他、「多くの人（ex. 社会人・学生 etc...）と関わることができた（21.1%）」、「社会力（ex. 調べる・行動・プレゼン etc...）がついた（15.8%）」、社会人のマナー等を学ぶことができた（15.8%）」、「責任の重さ・働くこと（必要なこと）を考えた」（10.5%）」などがある。

（2）学びの事例

インターンシップ授業を通して学生が感じ、学んだことの詳細は省略するが、「中小企業の企業内容」「人間的な成長」「社内の人間関係・意見の反映」「企業と地域との関わり」「今後の職業選択」「社会人に必要なもの」「仕事を通じて得るもの」「仕事との向き合い方」など、様々な観点からの学びができたという報告があり、次に学びの例を紹介する。

○アルバイトなんかとは違い、「その企業の魅力を発見し、それを伝えよう。」という姿勢で職場体験したから様々なことに意識や関心を持って働くことができ、物事をより客観的に見ることができた。また、未だに漠然としている、将来自分が就くであろう職業について自分に最も適した職を探すための良い材料となった。また、自分がお世話になった企業では、特にあれこれ指示が出されて仕事をしたわけじゃなかったので、自分で考え、自主的に行動する体験ができ

たと思う。

○この授業を受講する前は、「働く」ことに対して何も分からない状態だったが、「働く」ことの辛さや楽しさ、喜びを実感することができた。実際に働いてみて、青果店の具体的な仕事内容や、果物の保存方法が分かり、新しい知識を得ることができた。また、他の企業に体験に行った人たちの意見など、様々な角度から「働く」ことへの意識が聞けて興味深かった。色んな種類の企業の話も分かってとても役に立った。

○働く姿を身近に見て、「社会人として働く」ために必要なことを、これから就職するまでに身につけていく時間がある私にとって、早くにこのような経験をさせていただき良かったと思う。実際に働く姿を見たり、話を聞いたりする中で「働く」ことについて考えることができて良かった。

○職業選択のときの考え方を見直すことが出来たこと。また、入ってみないと分からない会社の雰囲気を大学生のうちに体感できたことや、大学を卒業して社会人になった方から直接、大学生のうちにやっておいたほうがよいことを聞けたことが良かった。

○とても楽しかったし、充実していた。授業とは関係していないけど、同じグループの人が自分とは初対面だったけど、とても優秀で向上心があって久しぶりにそういう人と話したり、一緒に行動したりしていい刺激を受けた。自分も様々な人にしっかりと自分の考えを伝えられる人になりたいと思った。

(3) 学生が発見した中小企業の魅力

学生は、インターンシップ授業で自分の職業感や社会人として必要な学びをするとともに、体験先の中小企業の魅力をしっかりと発見しており、以下にその一部を紹介する。なお、中小企業の魅力をPRするポスターやプロモーションスライドは省略する。

○縦社会というよりもむしろ横社会。仕事の時は皆さん真面目だが、休憩中などは年の差は関係なく、くだけていた。一見関係ないかも（仕事と）しれないけど、リラックスしている時こそ人の話って素直に聞けたり色々な側面が考えられるから、これが一番だと思う。

○私が発見した中小企業の魅力のうち、一番良いと思うことは、マニュアルがないということです（業務上の基本的なマニュアルはある）。大企業のようにマニュアルに従うような仕事は毎日単調で変化がなく、仕事がつまらなくなる。一方マニュアルがないと、自分のやりたいことができるし、新たな発見が生まれやすい。それが中小企業の一番の魅力だと考えます。

○社員一人一人が自分自身で考え行動し、会社のために懸命に頑張っていることです。中小企業は、一人の頑張りにより会社の成績を上げることができたり、社員が直接社長に意見を言うことができたりするため、社員のモチベーションを高いところで維持できるというところが魅力だと思う。

○時代が変化していくなかで、会社自体も変わろうと、「新しい事にも恐れずに挑戦」していることです。

○お客様との関わりを大事にしていて、地域にとても密着していることです。それは長年培ってきた、地域の方々との信頼があるこそだと思う。

○個々人の力を発揮しやすい場だと思いました。逆に、そのことは、それぞれの人にかかる責任が大きいので、中小企業で働けば自律心がより成長すると思うし、責任を果たそうという使命感が強く感じられるようになると思いました。

2．「社会人基礎力」に関する授業前後の調査から見る評価

今回の調査内容は①意識の変化、②前に踏み出す力、③考え抜く力、④チームで働く力の４つの観点のうち、本授業のカリキュラムからみて、育成が可能な内容を抜粋し、事前及び事後における意識調査の比較から授業の効果を分析することとした。図３はカリキュラム構成と評価の観点を示したものであり、ここでは、平成25年度のデーターを紹介する。

以下、効果が見られた例として、授業開始時と終了時の変化を示した図４であるが、授業終了時には「とてもそう思う」「そう思う」が増加している（赤

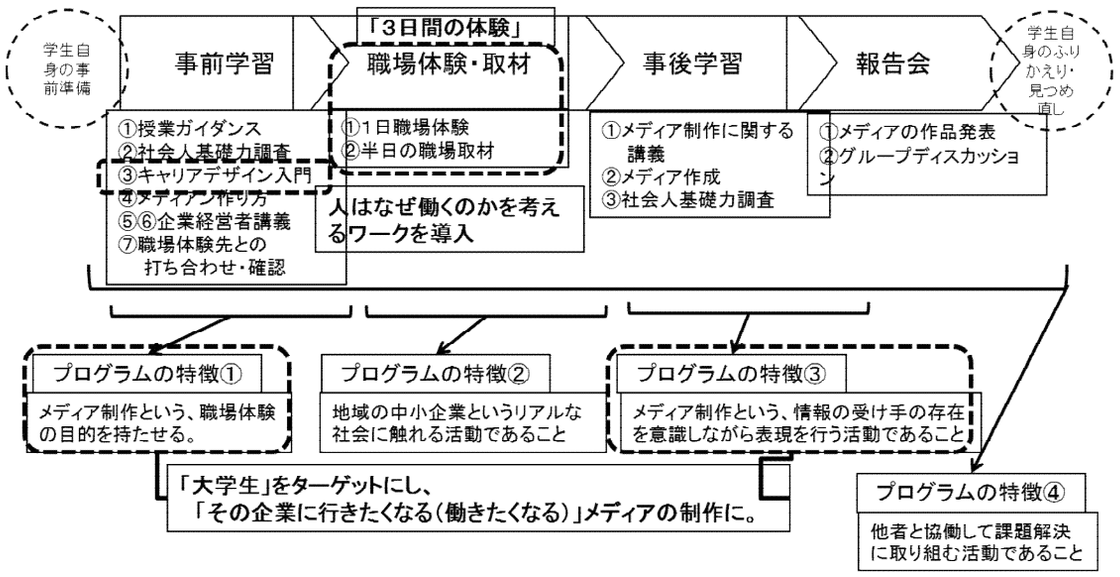

図３　カリキュラム構成と評価の観点

い棒グラフが左に移動している）項目の例を紹介している。

（1）意識の変化について

意識の変容が比較的大きく見られた（成果と考えられる）項目は、「自分の好き・嫌いがわかる」「自分の興味関心がわかる」「自分の得意・苦手がわかる」「自分の価値観がわかる」「職業・企業を知る必要性がわかる」「大学での学びの関係性がわかる」であり、特徴的なものを図４に示す。平成24年度（学年末の開講）と比較すると、前期授業（夏季休業中）という、自身の適性や価値観がわからない状態からのスタートだったため、変化が大きく生まれたと考えられる。

大学での学びの関係性に気づくという効果から、大学入学から早い時期にインターンシップ（働く体験）を含むキャリア教育プログラムは、大学の学びへの学習意欲を高めることができる可能性があると考えられる。

また、図５で示した項目について、事前と事後の比較について、事前を０とした時の個人レベルの変化を示したものが図５である。事前を０として、事後のプラス方向への気づきが多くみられる。マイナス方向は、「事前はそう思っていたが、実際の自分はそうではなかった」という意味でマイナスであるが、新しい「自分のマイナス」の気づきができたと解釈することが出来る。

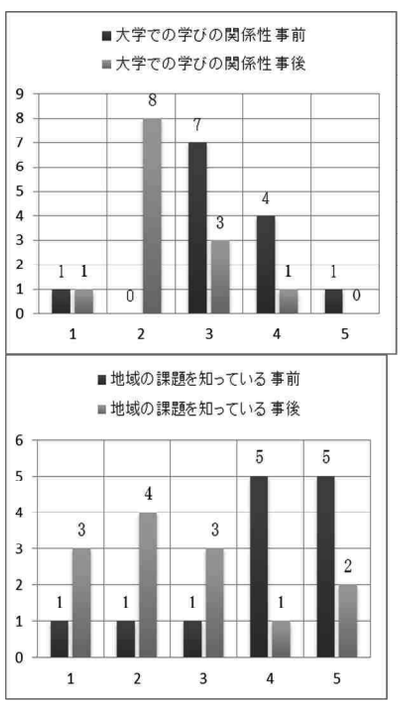

図４　意識の変化の例

全体的な傾向として、「変化なし」（０）が多いのが特徴と言えるが、事前段階での評価が高い傾向があったことが関係していると考えられる。中でも比較的プラスに変化した傾向があるのは以下の項目は「地域の課題を知っている」「地域産業について理解している」「大学での学びの関係性がわかる」であり、自身の志向性と社会で求められることのつながりを理解することで、学習意欲につながる可能性があると考えられる。

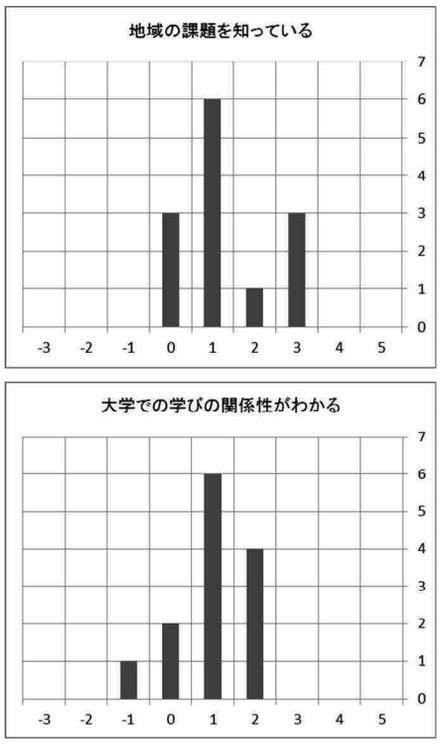

図５　事前からの変化の様子

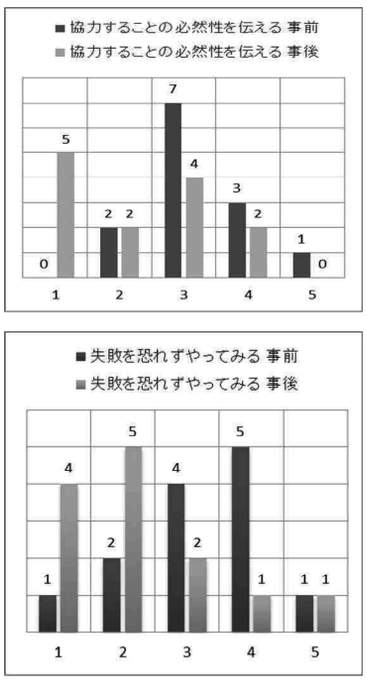

図６　「前に踏み出す力」の変化の例

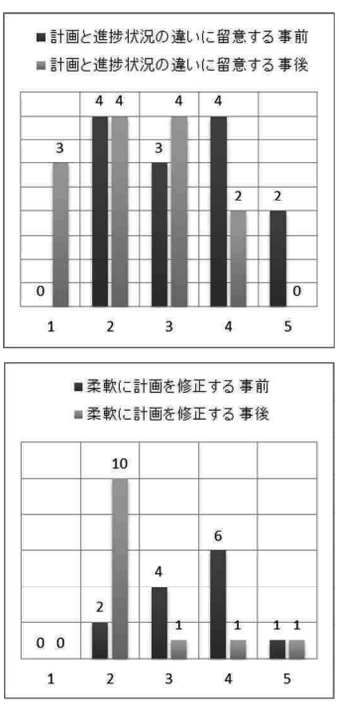

図７　「考え抜く力」の変化の例

（2）社会人基礎力に関する項目

①「前に踏み出す力」への効果

事前と事後で実現度に変化が大きかったのは、「主体性」に関しては、「とても」に動くことはなかったが「まあ」を含むと変化が見られた。更に、「協力することの必然性を伝える」等であり、特徴的な例を図６に示す。

特徴的な項目としては、「実行力に関する項目の変化」であり、３日間のインターンシップに加え、メディア作成という体験活動の中で、「実際にやってみる」ことを通して、「実行できた」という回答が多く、自分自身への自信が生まれていると考えることができる。

②「考え抜く力」への効果

全体的に評価が低い傾向があるが、中でも変化が見られたのは、「計画と進捗の違いに留意する」で、「まあ」まで含めたときに変化が見られるのは、「他者の意見を積極的に求める」「作業プロセスをあきらかにし、優先順位をつける」「柔軟に計画を修正する」であり、特徴的な例を図７に示す。

特徴的なこととして、インターンシップ（実際に働く体験と、期限内にメディアを制作するという働く疑似体験）を通して、実社会における計画と進捗の違いや、それらを意識することの必要性に気づくことができたと考えられる。

③「チームで働く力」

事前と事後で変化が見られたのは、傾聴力では「相手に話しやすい情況を作る」「相手の話を素直に聞く」であり、柔軟性では「相手の気持ちになって理解する」である。その他として「迷惑をかけたと

き、適切な行動をとることができる」「ストレスの原因を見つけて取り除く」「自分の役割を把握して行動する（「まあ」まで含む）」などであり、特徴的な例を図８に示すが、全体的に評価が低い傾向がある。

特徴的なこととして、平成24年度と比べると、「事前」の評価が低いが、伸び幅が大きい。インターンシップ及び事前の打ち合せで、深く他者と関わる機会がより多かったことで、「他者との関わる姿勢」に関する変化が生まれたものと考えられる。また、事前評価から低い傾向があることから、社会と関わることに対してのストレス感があったことがうかがえる。また、インターンシップそのものがストレスのかかる場であったと考えられるが、体験することで、向き合う姿勢が生まれたものと考えられる。

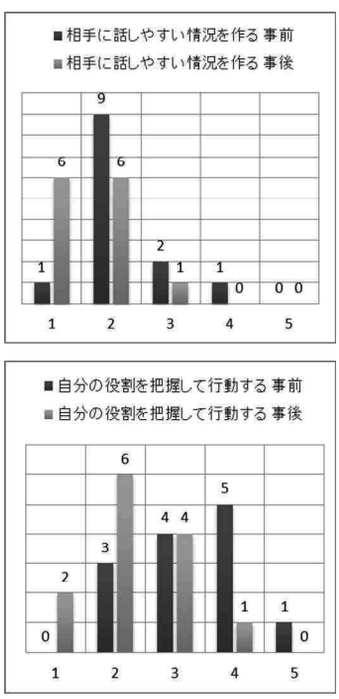

図８　「チームで働く力」の変化の例

（3）社会人基礎力から見た授業改善への視点

①インターンシップ前の“意識づけ”の大切さ

インターンシップの事前学習として、どのような意識づけを行うかで出てくる成果が異なると考えられる。特に、自身の「現時点での価値観」について客観的に把握することは、インターンシップでの経験を、自身の価値観や現状と比較して評価できる力につながっていくのではないか。

②関わる大人（講師・受入先）の関わり方

関わる大人（講師・受入先）がどのようなスタンスで学生に関わり、メッセージを発信したかが、学生の変化に大きく影響している可能性は否めない。今後のインターンシップの継続に向け、以下のような項目を整理していく必要がある。

・授業の目的を考慮して、学生に紹介する受入先企業の選定基準を明確にしておく。
・「企業の顧客にできるかぎり直接出会う体験をさせる」や「受入先の方は上司役を担っていただき、日々の目標設定とふりかえりを行う」など、受入先での体験内容（受け入れ企業に何を依頼するか）について、企業との事前打ち合わせが必要である。

３．インターンシップ報告会への参加者からの評価

授業プログラム外に、インターンシップの整理と評価の目的で実施している「成果発表会」を本事業の関係大学の先生方へ公開し、当日の授業公開を通しての、下記のような意見をいただくことができ、平成26年度の授業改善に生かしてきたところである。

【授業の成果】

○学生からすれば「学びの実感」や「成長の手ごたえ」をしっかり感じる科目であり、キャリア形成の入門的体験学習として学習効果の高いプロジェクトであると思う。

○３現主義（現場・現物・現実）に立脚したフィールドワークの効果と成果が伺えた。身近な中小企業に着目したことも、学生の主体的、自立的な取り組みと成果につながったのではないかと思う。

○企業の魅力を伝えようとキャッチコピー、写真、音楽など各班の工夫が見られた。関係者へのインタビューを通じ生の声を聞くことにより学生自らの気づきにつながり就職活動への意識づけや自覚にもつながっている。

○受講生の職業に関する視野が広がったことがよく伝わってきた。報告会、グループディスカッションの進行を受講生に担当させることが、コミュニケーションの面で効果があるように感じた。記録ノートの利用も効果的と感じた。

○学生が中小企業の経営に興味と関心をいだき、職場体験で気付き、発見したことをDVDに編集するアイデアは参考になった。
○ディスカッションの中では魅力だけでなく課題も挙げており、3日間という短時間で中身の濃い体験をしていることが伝わった。
○企業側のメリットとして、学生目線で自社評価を得て「企業もうれしいだろうな」と感じられた。

【改善の視点】

○短期間で濃密な時間を過ごすので、数値に変化がみられるかもしれないが、社会人基礎力の意義が測定できるのか疑問に思った。
○目標達成理論というものがあるが、事前学習で各々の行動目標を明確にしてもらい、全員で共有すると、もしかしたら会社・商品紹介になる割合が少し改善されるのではないか。
○就職におけるミスマッチの解消・是正につなげるためには、「取材」「PR」「会社の魅力紹介」のスタンスから一歩踏み込み、「自分が見つけた働きがい」や「自分がこれから身につけたいと感じた能力」等の、主体的な視点で発表するとさらに教育効果があがるのではないかと思った。
○授業目的との関係では妥当な内容のプレゼンだと思うが、受入企業がディスカッションに参加する形態が採れれば、より効果的だったような気がする。また、自らのキャリア形成との関係で今一つの突っ込みが必要ではないかと感じた。

Ⅳ　考察

現在、平成26年度の授業成果及び3年間を通した授業改善から見た授業成果に関する分析中であるが、現段階での考察を次のようにまとめることとした。

1．授業改善と継続のための視点

(1) 学生の授業評価からの視点

受講した学生自身は、職業や企業、自分自身への気付き等についての学びが出来ており、多くの受講生が「もっと多くの学生が受講できるようにPRすべきです。」という、意見があることからも、この時期のインターンシップ授業としての目的が達成されたと考えられる。しかし、受講生が少ないという現状から、1～2年生の時期でのインターンシップ授業を大学としての、キャリア教育プログラムへの体系的な位置づけが必要であると考える。

(2)「社会人基礎力」に関する調査結果からの視点

社会人基礎力のデーターについては、2つの観点から整理する必要があると考えている。1つは、社会人基礎力が、短期間でのインターンシップ授業での変化について、どれだけ学生のキャリア形成に繋がっているのかという点である。2つ目は、入学間もない学生の学びを、その後の学修に継続していく学習体系の必要性からの整理である。この点について大きな課題であり、「まとめ」で述べることとする。

(3) 授業実施体制からの視点

前述したように、本授業は大分県中小企業家同友会や大分県「協育」ネットワーク協議会、専門的な調査研究機関等と協力を得て実施している。特に、職場体験先や企業主の企業経営等に関する講義等の、具体的な学びの場の設定に大きな役割を担っている大分県中小企業家同友会との連携が大きな意義を持っている。「最終的には、企業に就職してすぐ生かされる（職務遂行）の力と、グレードアップしようとする人間性」を求めている中小企業にとっても、本授業は有効であるという認識から、全面的な協力を得ることができている。さらに、授業過程における専門的な指導場面の講師を紹介・斡旋する役割を担っている大分県「協育」ネットワーク協議会、専門的な調査研究を行うキャリア教育コーディネーターネットワーク協議会の役割も大きく、こうした、大学を中心とした地域の様々な機関等とのネットワークが不可欠であると考えられる。

2．まとめ

高等学校におけるキャリア教育に関する指導要領の改訂において「産業現場等における長期間の実習を取り入れるなどの就業体験の機会を積極的に設ける」「地域や産業界等の人々の協力を積極的に得る」

となっていることから、今後、地域や産業界等との連携に基づく充実した就業体験により、高校教育段階の職業教育を通じたキャリア教育が推進されることとなる。小学校から高等学校までのこうしたキャリア教育を基盤とし、社会の入口へ導く大学におけるキャリア教育の方向性が問われているのではないだろうか。

本研究における授業公開での指摘や考察でも述べたよう、本報告で示している「社会人基礎力」が、学生のキャリア形成にどれだけ有効であるのかについては疑問に残るところではあるが、インターンシップ授業による効果としての意識の変化があったことは確かである。大学関係者を含め、教育者は、学習者にとっては「気付き」の範疇でしかない各授業を、どう継続的に積み重ね、社会人基礎力が培われる学修カリキュラムを構成することが求められているのではないかと考える。